

科学技術政策担当大臣等政務三役と

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員との会合議事概要

- 日 時 平成26年8月7日（木）10：00～11：02
- 場 所 中央合同庁舎8号館 8階特別中会議室
- 出席者 山本大臣、原山議員、久間議員、大西議員、内山田議員、中西議員、
橋本議員、平野議員
倉持統括官、中西審議官、森本審議官、山岸審議官

○議事概要

議題1 研究不正に係る有識者ヒアリング

○原山議員 先週に引き続きまして、本日は2名の外部の有識者に来ていただいてヒアリングをさせていただきます。

本日の予定は、大学サイドから見た研究不正についてと、それから研究者サイドということで、学術会議の若手アカデミーの代表でいらっしゃいます駒井先生から、研究者として、また若手の視点も入れた形でもってお話しいただきたいと思います。

〈奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科駒井章治准教授から説明〉

○山本大臣 短い時間で色々問題点があったと思いますが、1つは、私が科学技術担当大臣として最も関心を持っているのは、研究不正というのはどこでも起きると思っています。日本は恐らく諸外国に比べて少ないと勝手に信じているのですが、起こった時にどうするか。その研究不正に対する対処が未来の、例えば、駒井先生のような次世代の人たちの活動にどう影響を与えるのか。研究不正にどう対処するかが、将来の研究環境とか、所謂次代を担っていく人たちの活動にどう影響を与えるのかというところが常に私の視点なので、まずその観点から1つお聞きしたいのは、早稲田の博士論文の問題。実はこの前のヒアリングでも少しお聞きしたのですが、ぜひ伺いたい。

結局、論文そのものに不正があっても学位は取り消さないという、早稲田の有識者の委員会の意見が出た、これは、先ほど言った研究不正に対してどう取り組むか、それがどのように未来に影響するかということについて言うと、極めて大きな問題だと思っており、前回の時にも少し言いましたが、世界大学ランキングでハーバードを抑えて3年連続トップである、カルテック（カリフォル

ニア工科大学)を訪問して、私が得た雰囲気だと、やはりここをきちんとやらないと、例えば研究論文そのものは何か不正があった、捏造があったみたいな結論を出したにも関わらず、学位は取り消さないというような、説明が分かりにくいままであると、カルテック(カリフォルニア工科大学)は早稲田のPh.Dを採らないだろうという雰囲気です。早稲田はいい大学であることも間違いないし、素晴らしい研究者も生まれているし、それにも関わらず、この扱いを間違えると、早稲田だけじゃなくて、もしかすると日本の大学、Ph.D全体に影響を与えるのではないかと思うのですが、まずそれをどう思っているかということが1点。これは研究不正に対する取り組みということで、私は大きな問題だと思っています。

それからもう一つ、なかなか聞きにくいのですが、笹井副センター長がああいう形で亡くなりました。科学技術大臣として神戸のセンターを視察した際も案内していただきました。とても情熱のある方で、これはもう日本にとっても大きな損失だと思っています。世界的な研究者であり、非常に衝撃を受けたのですが、私は、あのような世界的研究者を追い込んでしまった構図みたいなものは何なのかというのはきちんと確かめないといけないと。こういうことが二度と起きないためにも、STAP細胞の件について言うと、論文も含めて、まだ論文のどこが本当に正しくてどこが正しくないかという検証は終わっていない訳で、ここはきちんと検証しなければいけないと思っています。これも研究不正をめぐる大きな問題なんですけれども、その点について、駒井先生のような若手研究者は率直にどう思っているのかということをごぜひお聞きできればと思います。

○駒井准教授 まず早稲田の問題ですが、やはり色々なところでお話を伺っていると、対応はよくなかったのではないかなとよくお聞きします。というのは、日本全体のPh.Dの質の悪さみたいなことに汎化することが懸念される訳ですけれども、恐らくそれが一つ一番大きなことだと思います。

どうすべきかについては、早稲田等々私立の大学に関しましては、やはりマスエデュケーションになっていることは間違いないと思います。1人の教員当たりの学生の数というのが非常に多い。大学院であったとしても非常に多いと思いますし、教育をサポートする人材が足りないということと、国立大学でもよくあるのかもしれませんが、教員の成果につなげるために、やはりスピードを求めることがありまして、本気で学位を取らせるといいますか、論文一つを書きこなすといいますが、書いて、書いたものを自分で提出するということに余り重きを置かれていないといいますが、研究の教育という視点が割と弱くなっているような印象はあります。ですので、ここは本気で日本のPh.Dの質を上げるというところに注力して、教員のほうも自らの直接的なアウトプットを求めるのではなくて、教育をすることで2次的、3次的に人材を輩出するという方向のアウトプットというのも一つの評価基準とすることによって、正しく教育された学生を輩出するということを求

める必要があるのではないかと思います。

もう一つはS T A P細胞の検証に関してですが、若手のみならず、色々な先生方にお話を聞く機会がありますが、よく聞くのは、もう要らないのではないかと聞きます。私自身の考えは、検証実験というのは、自然に淘汰されると思っていて、ある、なしに関わらず、もしかしたらあるのかもしれないですし、多くの人はないと思っているかもしれませんが、ある、なしというのは科学の歴史が判断するんですね。なので、時間は多少かかるとは思います、もちろん今の説明責任というのはあると思うので急いでやる必要があるのかもしれませんが、私自身は、時間がとれますか、科学の発展そのものが解決するのではないかなと思いますので、特にここで検証のためだけに研究費等々を使うべきではないと思います。

○山本大臣 私が聞いたのは、検証実験じゃなくて、今言った、例えば論文も含めた検証は特にもう余り必要ないのではないかとおっしゃられたのですが、全体、つまり、この一連の事件、この一連の問題があって、それをどのように対応してもらおうと、その後次に出てくる人たちに禍根を残さないのか、どうやれば、後進の方々がやりやすい状況になるのかということなので、検証実験そのものというよりも、検証というか全体、今言った、例えば論文のことが一つの例だと思うのですが、やはり依然として、何が事実で何が事実じゃなかったのかというのが結局分からないですよね。だから、そういうところもきっちり調査をして、例えば論文の中身についても事実と事実ではなかったことをはっきりさせておいた方が、例えば不正防止の対策からいってもいいと若手研究者の立場から思うかどうかという話で、検証実験そのものについて聞いた訳ではないのです。

○駒井准教授 若手の観点なのかどうかは分かりませんが、つい先日、若手の研究者を集めて不正に関するシンポジウムを開かせていただいたのですが、多くの場合、罰則はやはり余りよくないのではないかなということで、よりポジティブな方向に、転んでもただでは起きないほうがいいのではないかなという意見が多かったので、余り若手が今回の事件ですごくネガティブな影響を受けたという印象はなくて、むしろ、今回よくなかったから、これをばねにという印象が非常にありまして、ですので、せっかくそれぞれの若手のメンバーがそういう内的なモチベーションを持っているので、それをプロモートできるような何がしかのことができたらいいなとは思いますが、そういう意味で、今回のことに関しては、ここまで来てしまっていますので明らかにしていく必要があるのかもしれませんが、今後、だからどういうふう展開していくかということに関しては、モチベーションをうまく引き出せるような展開というのを望むのが意見と思います。

○原山議員 今の若手を集めてシンポジウムをすること自体がすごく有意義なことだと思いますし、通常なかなかそういうことを考えないで研究しているのですが、やはり再確認するというのが大事で、しかも1人の意見ではなくて複数の人たちが同じことを考えて、こうすべきだというふうの方

向性を出すということも有意義だと思います。

それから、ポジティブな方向って非常に重要でして、先ほど一番最初におっしゃったモチベーション、何のために研究しているというのがないと、職業としてやっているだけじゃない訳なので、その辺を見るのが重要なと思うのと、それから、先ほどおっしゃった検証の話ですけれども、全体の検証ですね。機関の検証もありますし、個人レベルで我々がやることもあるのですが、もう一つは考えなくてはならないのは、研究者の立場からすると、何か1つ起こった時に、直接自分が関与していなくても、その近くにいる人、あるいはその下にいる人、または連携している相手にインパクトが来る訳です。それをいかに切り離すか。そういうことを考えると、やはりお互いに一緒にきっちりとやりましょうという流れをつくらないと、いつまでたってもこの問題を引きずってしまうということでしょうか。

○駒井准教授　そういうこともありましてネットワークというのは非常に大事で、ネットワークというかコミュニティーといいますか、横、縦、それから国内外、異分野を問わず色々なネットワークをつくって、色々なことに関して話ができる透明性の高い環境というのをつくっていく必要があるのかなと思います。

○橋本議員　駒井さん、これは何を聞かれているかという、サイエンスコミュニティーが、それ以外のところから今非常に疑われかけていて、それに対して若手としてどう思いますかと、そういう質問です。その危機感をどれぐらい共有していますかということをお大臣は聞かれて、私たちもすごく思っています。私もたまたまこういうポジションにいるから、その辺のことがすごく分かるのですが、今のそういう社会からサイエンスコミュニティーがどう思われかけているかということに対する危機感の共有が不十分じゃないかなという気がしています。それは若手としてどう見えますかと、こういう御質問ではないかと思うのですが。

○駒井准教授　若手どうこうではないと思っていますし、もちろんシニアの先生方も非常に重く受けとめていらっしゃると思いますし、若手ももちろん重く受けとめております。ですので、なおさらどうすべきかということをお非常に強く考えておりました、我々個人個人のモチベーションを上げることのみならず、社会全体も巻き込む形で、ここで「科学を文化に」と書かせていただいたのはそのような意味を含んでおりました、全体で、メンターシップの隣にフォロワーシップというふうに書いてありますが、リーダーシップを持つに当たってはフォロワーシップは非常に大事だと思いますので、一度フォローし始めた人には割と手厚くといいますか、フォローする気持ちというか、マインドセットみたいなものを涵養できる方向性も非常に大事ではないか。そういう意味でも、教育というのはすごく意味の高いことだと思いますし、ネットワークそのものも非常に重要なことかと思えます。

○内山田議員 研究といっても、例えば哲学のようなものだと、個人がどのように考え方をまとめたかということで一つの論理をつくる訳ですから、これはいいとか悪いとか言えるものではないような気もしますが、少なくとも科学研究となると、非常に最先端な分野では、自分は新しい発見をしたと思ったが、そうではなかったということは、それが故意かどうかは別として、あり得ると思います。

ただ、その時に、科学において大事なことは、ほかの人が再現できるかどうかということではないでしょうか。だから、再現できないということが分かった時には、こういうことがあるのではないかと思ったが違っていったとか、あるいは特殊解を一般解のように扱ってしまったとか、そのように判断される事になると思います。その結果としては、その研究者は研究者としての素養をある意味疑われるということですね。これはやはりどこかで自分が発表したものについては責任をとる事だと思います。

だから、そういうメカニズムがあればいいのではないかと思います。もう一つは、今回も少し話題になりましたが、研究論文に色々な方が共著として名前を書かれています。あれは一体何を意味しているのだろうかというのが我々民間人には理解できないのです。例えば企業が発表する時に、当然担当した人の名前だけではなく、関係者や上司が名前を書くことはありますが、その名前を書くということは、ある意味一緒に責任をとるという意思表示です。ですから、上司であれば部下の論文を自分で精査して、自分も間違っていないと思った上で自分の名前を使う訳なんです。所謂学術研究の世界であそこに名前が書いてあるということは一体何を意味しているのかなというのが少し分からなくて、これが今回、問題を何か混乱させているのではないかなと思いました。

○駒井准教授 私が答えることかどうか少し分からないですが、もちろん責任をとるという意思表示の一つだと思っておりますが、残念ながら現代の経済社会で研究を進めていく上で評価の一つになっていることは間違いなくて、論文一つが研究費でありポジションの足がかりになるということは事実になっていると思います。ですので、名前が載ること、自分の社会的な評価といいますか、学術界からの評価というのが一つ一つ上がっていくという基準の一つに今なっていると思いますので、どれだけコントリビュートしたかに関わらず、載せたいなと思うことはあるのではないかなと思います。だから、それは最近色々な論文とかを投稿する時に、どこにどのようにコントリビュートしたかということを明示しないといけなくなってきておりますので、それに関しては徐々に改善してきているのではないかなと思います。

○橋本議員 私の感覚で答えさせていただきますと、内山田議員の聞かれたことに対しては学術界においても全く同じです。ただし、今回の論文なんかは典型ですが、分業体制、幾つかのエキスパートが集まって一つの論文を書いています。この点が少し問題を複雑にしている。そういうことは結

構ありますが、特に今回の場合はそれが明確に出ているように思います。ここは責任を持つけれども、こちら側は分からない。それは平野先生の方がより詳しいと思いますが、私たちの分野ですと比較的そのようなことはなくて、全体に対して責任を持つのですが、分野によってはそのようにブロックで作らないといけない場合があるので、今回、その部分が結構混乱しているかなと感じています。

とは言っても、出したものに対して全部に責任を持つのは当然です。自分はここしかやっていないから、こっちに対しては責任を持ちませんなんていうことは、我々の世界だって当然そんなことはなく同じです。

○原山議員 ジャーナルのほうでもそれに対する対応策というのは少しずつ打っていて、明確に役割分担を書くとか、そういう条件づけというものを書いていますが、それにサインして実質やっていないというギャップがあることは確かです。

それからもう一つ、今、役割分担でエキスパートーズが違うから全体が見えないということが多々出てきている。それに対してどうするかというと、やはり名前を連ねるからには、その全体を見られる人に誰かに代わりとして見てもらうという手もあるのではないかという議論もあります。ですので、その辺はまだ今後どうなるかという、やはり問題意識というのは皆さん持っているし、そのクリアな解はありませんが、少しずつそれに向かった解を見つけつつあるというのが状況かと思えます。

○山本大臣 先ほど橋本先生がおっしゃったように、研究不正に対する対応によって、まさにサイエンスコミュニティの信頼性が疑われてしまうということ。疑われているとは、そこまでは思っていないし、日本の科学技術は最先端だと信じていますし、事実そうだと思いますが、やはり対応を間違えるとそのような状況になっていってしまうのではないかと、それを一番懸念しています。早稲田の例は、別に早稲田が悪いとか言うつもりじゃなくて、これは一つの例だと思っていますが、対応一つ間違えると科学技術コミュニティ全体の信頼性が下がる、日本の大学のブランドが下がる。

だから、要は、私は科学者ではなく、Ph. Dも持っていないので、Ph. Dを、私はすごく尊敬しているので、だからすごく拘っている訳です。前も少し話しましたが、Ph. Dって、ただ学問の真理を探求するスタートラインに立ったのではなくて、やはりあらゆる意味で倫理もあり、バランス感覚もある人に与えられる称号だとずっと思ってきたから少し拘っているのですが、要は、学問の世界だからはっきりさせるのは難しいのかもしれない、不正防止対策みたいなものも、STAP細胞はないと証明するのは難しいと言う人もいますが、映画「ゼブラーマン」の哀川翔さんの決め台詞ではないですが、「白黒つけたぜ」と、ある程度白黒つけていった方がいいのではないか

と感じています。

この問題も色々なことがあって、なかなか、多分また難しい要素も色々出てきているかもしれないですが、世の中の注目をこれだけ集めて、世界にも発信されていることについては、やはりある程度、もちろん科学技術とか研究とかの特性から曖昧なところもあるのかもしれないが、私はある程度白黒つけていかないと、この問題がすごく曖昧なままで終わってしまうと、また同じようなことがあった時に、例えば次から出てくる研究者の人たちがマイナスを被るのではないか。これは松本先生に後でお聞きしようと思っていたのですが、その辺りを伺いたかったのです。

駒井先生は、今日は随分遠慮されていらっしゃると思いますが、若手研究者として、今、既存のサイエンスの人たちは何をやっているのか、今の先生たちは何をやっているのかと、これからどんどん活躍されていく立場として、何をぼけたことを言っているのか、みたいなことがあればぜひお聞きしたいなと思って聞いたので、やはり私は政治家だから少し感覚が違うのかもしれませんが、曖昧にならざるを得ない部分があったとしても、やはり白黒つけていくところがないと、日本全体のブランドに大きな影響を与えるんじゃないかということをカリフォルニア工科大学で感じました。

○駒井准教授　ここで1つ言わせていただきたいのは、我々が色々話を聞く中で、やはり本気で教育的なメンターシップに取り組む姿勢というのを、次にどういう人材を輩出するかという方向に力を入れていただきたいというところだと思っていまして、もちろん今回の処分云々に関しても大事だと思いますが、その辺に関しては我々に分からないところではありますので、色々なことがあると思いますので、そこは少し分からないのですが、今後、やはり人材の質というのが問われると思いますので、このように改革したからここは大事ですということを本気で示せるような対策を示し、本気で取り組むことが恐らく将来的には大事ではないかなと私は考えております。

〈東京大学 松本洋一郎理事・副学長(研究推進・研究倫理担当)から説明〉

○大西議員　何か問題があった時に学内で調査委員会を設置して調査をされると思いますが、その調査をやっても、非常に調査に時間がかかるとか、先ほど大臣のご指摘になった白黒がつきにくい。捜査権というのはないので調査ですから、そこは、ただ大きな事案ほど社会が注目して加熱するということが起こるので、その時に調査をする上での工夫が何か考えられないかということがお尋ねしたいことです。

理研の事例では、私は、理研は6つあった問題のうち2つについては黒だというふうにはしているので、白黒つけたのだと思っています。ただ、それ以外に問題が出てきたので予備調査というのを今やっていて、その予備調査が本調査になれば、また調査委員会ができて追加的な案件について調

査するということになると思いますが、いずれにしても、それは科学的実験とは切り離してやると我々の質問に対して解答したので、その再現性があるかどうかということとは別に、論文自体の構成、不正をめぐって、2つは黒で、それ以外に黒があるかどうかということについて調査することだと思えます。

だから、そうやって理研は白黒つけたのですが、一方で、場合によってはそれは法廷に持ち込まれるとも言われているので、また別な展開になる可能性もあると思いますが、一般にはなかなか調査結果が出ない事例のほうが多いと理解しているので、東京大学でその点、どのようなお考えを持っておられるか、お聞きしたいと思えます。

○松本理事・副学長 東大も随分時間がかかっておりまして、色々なところからそのような問題のご指摘を受けているところでございます。

今までたくさんの調査をしてきて、その結果がアーカイブされているという状況ではなくて、ある意味手探りでやっているというところがございます。去年ぐらいでしたでしょうか、文部科学省に呼ばれてヒアリングを受けた時に私が申し上げたのは、例えば今までの研究不正の内容と調査の結果、調査のやり方というようなものが全てアーカイブされていて、データベースになっているとすると、調査が迅速に進むのではないかという事です。科学研究のやり方は習ってきている訳ですし、それに則ってやっている訳ですから、研究を進める上でも、そうしたアーカイブが役立つのではないかと思えます。

例えばアメリカにORIという組織がございますが、それは、彼らが今までたくさんの研究不正を抱えてきて、それをどう処理してきたかということでああいう組織ができた訳でございますので、そういったことが東京大学だけではなくて一般的にアーカイブされていれば、それを参考に調査していくことも可能になるのではないかと。そういったことによってさらに調査期間を短縮できるとか、合理的な調査ができるのではないかと今考えているところでして、東京大学としては、今までやった調査をできるだけ公開して、次の調査——余りそういうことがないように願うばかりですが、そういったところで使えるようなシステムを作ろうとしております。

○平野議員 今お話がありましたように、予防の観点から、研究倫理に関する教育は非常に重要だと思えますし、どの組織でも実施しなければならないことだと思えます。一方で、研究不正が起こってしまった際の対応として、どうやって調査を実施するかという点に関して、公的な第三機関のようなもので研究不正に関する調査を実施することとしてはどうかという意見も出ていますが、それについてのお考えをお聞かせください。

○松本理事・副学長 ケース・バイ・ケースだと思っています。第三者機関というか、一番その分野をよくご存じの方でないと調査できないところもある訳ですね。そういう意味では、第三者機関の

——あえて誤解を招かないように言いたいと思いますが、そのコミュニティーが、やはり学会というコミュニティーが、やはりそれに対してそれなりの意見をきちんと発信していただくということが重要ではないかと思っている訳です。

例えば、これは少し自分の分野に引き込んで申し上げますと、機械装置の事故があった時に、機械学会としてはすぐ調査委員会をつくって、それに対してコメントを出しておりますが、そういった研究不正だと思われるところがあれば、その学会の中で徹底的にその論文なり言われていることに対して批判的なディスカッションがなされるということが学問の健全性を保っていくということだと思います。不幸にして何か組織、機関が対応しないといけないということになれば、今のところのつくりは、その部局がまず予備調査をやるという構造になっています。それに対してやっているということですが、第三者機関という意味で言えば必要な分野というか、ケース・バイ・ケースでそういうことも必要だということはあると思います。実際に動いてもおります。

○平野議員 私も、第三者機関とかそういった調査機関を設置することが本当にいいかどうか分からないのですが、ただ、この問題を考える際に、科学における純粋な真実の話と意図的な捏造をはじめとする研究不正の話、この2つのことを決して混同してはいけないと考えています。先ほど駒井先生がおっしゃったように、ある事象が科学的に純粋に真実か否かということは、結局は科学の歴史により決められる、証明されるものです。これは、これまでの科学の歴史においてもずっとそう、最初言ったことがすぐには認められず、50年後にようやく「あれはやはり正しかった」となったこともあるし、逆のこともある訳で、結局、真実か否かということは、科学コミュニティーにおいて色々な人が色々な検証をしたりする中で決まっていくものなので、そのことについて余り社会がどうこう言うべきではないと考えています。一方で、後者の意図的な捏造をはじめとする研究不正に該当するか否かという問題については、調査を実施することが重要で、しなければならないと思います。

例えばS T A P細胞の話为例に採ると、S T A P細胞があったとかなかったとかいうことについては、科学の歴史によって必ず証明されるはずなので、問題はそこではなく、この一連の経緯の中で意図的な捏造をはじめとする研究不正があったかどうか。これは別に科学の問題ではないのです。だから、これは研究者や研究コミュニティーの問題でもないし、一般的な問題として処理できる問題であるため、そういう意味で第三者機関が調査を実施した方がいいのではないかと考えられるのですが、その点先生はどうお考えになりますか。

○松本理事・副学長 おっしゃるとおりだと思います。科学的な真実かどうかということは、長い歴史の中で決まってくることであると思います。ただ、最初に私が申し上げたのは、論文を書いて、その論文に書かれていることの再現性というのは、やはり著者がそこは担保してくれないとだめだ

ということを一つ申し上げました。

それから、外形的に——外形的にという言い方はよくないかもしれません。それが捏造であるのか、改ざんであるのかということは第三者機関でもできるかもしれない。だから、そういったことはかえって同僚じゃない方がやった方がいいということはあるだろうと思います。そこはかなり切り分けて、どこを調査するのかというミッションをちゃんと理解していないと、混同して変な調査がずっと続いてしまうということになりかねないということだと思います。

確かに今、色々なところで言われている、例えば写真に不適切な画像処理が施されていたのではないとかいうことは、それは第三者で十分やれるということだと思いますし、どのように研究が進められていて、その中で不正を喚起したのかということも丁寧にヒアリングをすれば出てくるだろうと思います。それはかえって第三者機関がやったほうが確実な答えが出るように思います。

○平野議員 やはりそういう研究不正があったかどうかといった客観的なことをきっちり調べるべきであって、科学的にそれが真実であるかどうかということ、やはり内容によって、それぞれすぐにわかることもあれば、1年後にわかることもある、さらには、10年後、あるいは100年後にわかることさえある訳です。だから、その点はもうやはり研究者コミュニティの中で自然淘汰される問題であって、そこと研究不正の問題を混同することはよくないと思います。一番重要なのは、捏造とか改ざんとか、所謂研究者の研究とは関係ない次元での意図的な不正行為、それをきっちり調べることだと思います。

○山本大臣 色々お聞きしたいことがあったんですけども、今、平野先生が再現実験のお話をされたので、先生は色々な調査に関わっておられるので、お伺いしたい。

大西会長が、理研は一応白黒つけたとおっしゃった訳ですよ。あの論文については不正があった、6つのうちの2つは不正だと。他方、今の再現実験、実証実験が必要かどうかというのは、色々ここで立証実験が必要かどうかというのは、ここで議論が分かれているところだと思いますが、小保方さんご自身がこの再現実験の中に入っている訳です。これは、私は政治家としては理解できるところで、これは理研の判断もあったし、色々な判断があって、多分科学技術の世論とか国民の理解とかとともに進んでいかなければいけないし、特に理研の場合には、法案が出れば私が担当するはずだったのですが、特定国立研究開発法人の候補としては総合科学技術会議で正式決定して、この理研を産総研とともに入れるかどうかということ判断しなければいけないので、色々なことを考えてこうしたんだと思います。

ただ、先ほど先生がおっしゃったように、例えば先生分野でも、何かあれば、その分野の学会が色々な意見を言うというのは大事だと言っていたのですが、科学コミュニティの方々は結構このことに厳しくて、なぜご本人が入るのかということ結構あちこちで言われますが、色々な調査

に関わってこられた先生の経験からいって、こういうパターン、こういう形で、ある意味で言うと、大西会長がおっしゃった言葉を借りれば白黒がついたとすれば、世の中は理屈だけで決まるものじゃないので、色々な理由で入っておられるかもしれませんが、これは調査のやり方としては先生はそのように御覧になっていますか。

○松本理事・副学長 客観的に白黒をつけるのはなかなか難しいと思いますが、論文を書いた本人、実験をやった本人はそこに十分確証を持って書いているとすれば、やはり再現性をチェックするというのはオーサーとして当然の責務だと思いますので、そこはやっていただく必要が全くないということはないのではないかなという気はします。それはやっても悪くはないと思いますし、それが真実かどうかというのはむしろ長い歴史の中で決まってくるということで、私が言いたいのは、論文を書くということの責任のあり方です。その重さは、書いた本人がどこまでも担保していかないとけないという意味で、再現実験はそういう意味で意味があると思います。

確かに周りから言われて、こんなものはないよというので切り捨てることも可能だとは思いますがけれども、やはりオーサーとして責任をとるという意味で再現させるというのはあってもいいのかなという気がします。

それから、外形的に明らかに捏造があったとかという問題は、それはもう結果が出ている訳ですから、そういう意味では論文としての体をなしていないことは確かでございます。

○原山議員 これて本日のヒアリングを終了させていただきます。お二方、どうもありがとうございました。

これをもちまして、本日の科学技術政策担当大臣等政務三役と有識者議員との会合は終了させていただきます。